

第一部 発端

(一)

連邦曆五七四年九月一〇日朝。

官邸の玄関を出たデュレーン恒星区政府主席イエフ・リンデックは、緑褐色の制服に身を包んだ男たちに行く手を遮られた。

「な……なんだ、君たちは……！」

返答はない。男たちの腕が素早く動き、リンデックを庇おうとしたシークレット・サービスの動きを制止する。レイ・ガンでは、一〇丁を超える荷電粒子ライフルに対抗するには明らかに非力に過ぎた。

酸素不足の熱帯魚よろしく、二度大きく喘いでから、リンデックは男たちの襟章に気づいた。

「ザ・ジャービス」！

「……と言つことです。閣下」

蔵のような体つきの男が一步を進み出る。巨軀という印象こそ与えないが、無駄のないなめらかな身のこなしが猫族の成獣を思わせる。さりげなく、全身を鎧った強靱な筋肉の存在を誇示する、その男にリンデックはたしかに見覚えがあった。

「ホウ中佐！」

「光栄です、閣下。一介の中佐ごときの名を覚えていて頂けるとは、栄誉これにすぎるものがありますまい」

「これは何だ、中佐。いったい、何の冗談だ？」

「冗談？」

鎗物を思わせる硬質で頑丈な風貌が皮肉っぽくゆがんだ。

「冗談でやっているつもりはありません。我々はいつでも真剣です。ま、もともと閣下たちにとって政治などと言つものは冗談半分でなさるべき

ものなのかも知れませんがね」

「ふざけるな。冗談でないとすれば、これではまるでクーデターではないか」

「クーデターではないように見えましたか？」

巨漢……ティ・リユン・ホウ機動歩兵中佐の返答は思い切りの侮蔑を込めたものだだったが、言葉の意味が思いがけなさ過ぎた。リンデックの顔面から、まるで潮が退くように血の気が去っていき、細かに全身が震え出す。

「状況を悟っていただけたようだ。では、護衛の諸君は武装を放棄してこの場に留まってもらふ。主席には我々に同行していただきたいのですが、同意頂けますな？」

「なぜだ。なぜ、こんなことを……こんなことをして、ただで済むと思っているのか？」

既に蒼白になっていた表情をさらに引き歪め、それでもリンデックは虚勢を張るかのように胸を反らせて巨漢の機動歩兵を見上げる。もつとも胸を反らせなければ、二〇センチ以上も高い位置にあるティ中佐の顔に視線を据えるわけにはいかなかったのだが。

「あんなことをしてただで済むとお思いだったのですか？」

「な……何のことだ？」

「では、閣下がなさったことの正当性をプリンセス・メイリアに向かつてご説明いただけますか？」

「な……」

「閣下と王女中尉の対談なら、どのTV局でも喜んで放映してくれるでしょうからね」

「あ……あれは、デュレーンの明日を思つてのことだ」

リンデックの声は裏返り、ほとんどヒステリックな響きを帯びた。「連

邦の鋼鉄の爪”に軍事力で対抗することの意味を理解しない。ザ・ジャービス”の無謀さを責め、蓋然性の高い“ザ・ジャービス”の軍事的な失敗に備える、政治家としての義務を振りかざす。デュレーン市民一〇億のために敢えて“篡奪者”ナイザルとの裏取引もした。裏切ったのはナイザルであって、自分ではない。それに政治とは非情なものだ。最大多数の最大幸福を実現する上で、ごくわずかの犠牲者や幸福を得られぬ存在は避けがたいものだ。

「ご立派です、閣下。無論……」

ティは別に反論する気はないようだった。まったく誠意のこもらない口調で応じ、それから放り出すように言葉を連ねる。

「ナイザル・ネレイドが相手ですから。あなたでは力不足なのは誰もが認めるでしょう。あなたがいくら勝ち目があつたと主張しても誰も信じてくれない。つまり、あなたは負けると分かっていた勝負に市民を含めた味方すべてを賭のチップにしてのけた大馬鹿者だということだ」

今度こそリンデックは絶句した。

「時間が無い。仰りたいことももうないようですから、そろそろ行きましょう」

「ど……どこへだ？」

「新しいデュレーン恒星区……というかターミア諸恒星連合元首に会っていただきます」

デュレーン政庁主席執務室。執務室に一步を踏み入れると、執務デスクの前に立っていた人物が振り返って彼らを出迎えた。

途上、複数のメディアが報じた“緊急ニュース”で、リンデックも事態を把握はしていた。情報としての理解が、具体的な人物の姿で裏付けられると、さすがにリンデックの声が悲鳴じみた響きを帯びた。

「ミスタ・タウナー！」

「悪いな、イエフ」

くゆらせていた葉巻を口から離し、リー・タウナーは大きく紫煙を吐き出した。

「ごついことさ」

「あなたまでが何故、こんな無謀なことを」

「お前がそう言つかね？」

タウナーは出来の悪い教え子に困惑する家庭教師の表情だった。

「一生懸命に戦っている連中の背中を刺すような真似をしたんだ。クーデターを起こされるかも知れん、くらの警戒はしてなかったのか」

「しかし……戦争は政略に従うべきであり、軍人は政治家の統制に……」

「学生か、お前は？」

苦笑をそのままにタウナーはリンデックの反論を弾き返す。軍隊とは官僚組織であると同時に悍猛な暴力装置でもある。平時の軍隊はたしかに官僚組織であって、文民統制に易々として従う。しかし、いったん戦争に突入し、惨憺たる戦闘を繰り返している軍隊は極めて危険な戦闘組織……猛獣にたとえるのがふさわしい……に変貌する。

「……まあ、その猛獣の背に乗っかってここに立っているわしがこんなことを言っても説得力はないが」

“ザ・ジャービス”とタウナーによるデュレーン政府への浸透はあまりにも容易だった。ナイザルとなお交渉の余地有りとしているのはリンデックと彼の側近だけだった。“このままではデュレーンが第二のコーラルになる！”……どんな脅し文句やスローガンよりも、それは強烈極まる説得力をもって、デュレーン政府組織だけではなく市民をも席巻したのだ。

ナイザルの演説の衝撃は通り過ぎると、デュレーン市民の多くの多くが職場を放棄して恒星区政府政府を取り囲んでいたのである。

「何とかしろ！」

「デュレーンを第二のコーラルにしまつつもりか」

「恒星区政府を何をしているのだ！」

「給料泥棒！」

デュレーン政府は、無論、デュレーンを第二のコーラルにするつもりもなかったし、給料泥棒に甘んじるつもりもなかった。リンデック主席と、彼の側近が官邸に閉じ込めて指示を出そうとしなくなったために、政府の中堅官僚達が本来、リンデックのなすべき行動を代行することになった。

デュレーン選出の上下院議員を初めとして、公式非公式のあらゆるチャネルを通じて連邦政府と、ナイザル・ネレイド連邦大統領に接近を試み、デュレーン恒星区が連邦政府に反逆するつもりがなく、過去にもなかったことを伝えようとしていたのである。

「なるほど……悪意はなかった、とおっしゃるわけだ。『ザ・ジャービス』とやらいう反政府活動組織を支持し、支援なさったことも、更にはル・ラント共和国政府との単独講和を主張されたことも……すべては、シエルメス連邦と連邦市民の最終的な利益のため……と」

連邦外務長官マシユバー・ピークは、デュレーン恒星区政府の使者に對し冷然と言いつたものである。

「更に情勢不利と見るや、『ザ・ジャービス』を裏切ったことも。いや、最初から裏切るつもりで支援を申し入れたとでもおっしゃるのかな？だとすれば、連邦政府は最大限度の警戒を示さなければならぬだろう。いつ、握手しているその背中を刺されないと限らないですからな」

「……」

「連邦と連邦空軍の国是は、反連邦勢力を懲罰することに容赦することなかれであること、これはご存知だったはずだ。散々、連邦の統一と安定に叛するような行為を続けておきながら、今更の弁解は些か聞き苦しい。既に状況は我々外交部門の手を離れたのです。この次、お会いするのはデュレーン全土が焦土と化してからでしょうな」

連邦空軍側の立場は更に冷然を極めるもので、交渉を求めるデュレーン政府に対して、連邦空軍の艦隊司令部も、新設されたばかりの統合作戦本部も頑なに門扉を閉ざし続けたのである。

デュレーンにとつての最大の不幸は、この時期に政府を指導すべき人物がイエフ・リンデックという“歩く無定見”であつたことだろう。デュレーン政府を構成する官僚達はそれなりに優秀であり、政治的な指導者を欠いた政府としては求め得る最大限度の努力を集中して、連邦空軍艦隊という巨大な軍事力の波濤の前に堤防を築き上げようと試みていた。

しかし、政治的な中核を欠く、ただその一事がデュレーンにとつては決定的な意味を持つた。デュレーン政府のある部門は連邦政府への交渉を試み、他の部署は連邦空軍の統合作戦本部や、あるいはレーフル・ファウルス・ネレイドの艦隊司令部に接近するすべを捜し求めており、また他の組織では軍事的な抵抗のための兵力をかき集めているという状況で、“泥沼にはまりこんだ恐竜”と評される有り様だつた。

更にリンデック主席も全く沈黙を守っていたわけではなく、間欠的に命令を発するのだが、これが前後で完全に矛盾した内容となる状態だつた。連邦空軍国防情報局長リヴェルト・レンディッツ少将は、七月一〇日にナイザル・ネレイドに報告している。

“今や、デュレーン恒星区は政治的には完全な混乱状態となつた。現在デュレーン恒星区を政治的に統一して支配している組織は存在しない”。

「全く情けないことだ。我がシエルメス連邦にも人がおらぬな」

ナイザル・ネレイドは嘆息したが、事情のすべてに通じている存在があったとすれば、「何をいけしゃあしゃあと……」と罵ったことだろう。リンデックの無定見さと権力への執着の強さを察して、「ザ・ジャービス」との離間を謀り、最終的に「バレルヴァレイ会戦」の帰趨を決した謀略の系は、このナイザル・ネレイドの手元から紡ぎ出されたものにほかならないのだから。

クーデターはほとんど一瞬だった。

動員された兵力はほぼ軽装機動歩兵一個師団ほど。政庁、放送局、航路局、宇宙港などの施設はみずから扉を開いてクーデター兵を迎え入れ、担当者の多くはクーデターを容認しない少数者を拘引して彼らを迎えたのだ。主席であるリンデックですら、今朝に至るまでクーデターの発生を知らなかったのもむしる当然だった。

「したくはなかつたんだがな。お前さんがたには任せておけなくなつた。せめてデユレーンなりともすくわねば、ターミア宙域はこれからひどいことになる」

「クーデター政権など樹てて……これ以上、連邦空軍に逆らえばそれこそデユレーンはコラルの二の舞になる。そのことがわからんのですか」「わかつたらんのはお前さんの方だよ、イエフ。ナイザルの放送を聞いただろう。ナイザルははっきりとターミア諸恒星区への懲罰を口にした。お前さんたちとの裏取引を暴露した。お前さんたちの個人としての身柄だけは、レーフラム・ネレイド少将を葬った功績に鑑みて保証してやる」とはつきり言明した」

「……」

「お前さんがたとナイザルがどんな密約をしつつたかは知らん。何か、あいつから書類でももらつておらんのか？ 書類とは言わん。音声か映像の記録はどうだ、メールの控えくらいとってなかったのか？」

「……」

「つたく、ガキでもあるまいに」

吐き捨てる口調だった。葉巻を大きく吸ってから、乱暴に灰皿に押しつける。灰皿には半分くらいまで吸われた葉巻が何本も、突き刺されるようにして並んでいた。

「向こうの言質はとつてない。こつちが喋ったこと、約束したことはすべて記録にとられていて、好きなように公表される。イエフ、お前さん、いったい何年政治家をやつとつたんだ……どうした、一言くらい反論して見る」

「……」

執務デスクの上から、タウナーは小振りなアタッシュケースを取った。無造作に放り投げられたケースを、リンデックは慌てて受け止める。

「持つて行け。通行証は出してやるし、船も手配してやる。どうせ、財産はもう金に換えてあるんだらうが？ デユレーンの政府はわしがもらつたわしたちが、ナイザルとナイザルの息子を敵に回して何ができるか、安全なところで見物している」

タウナーの手許でライターが微かな金属音を放つ。立ち上ったオレンジ色の炎が新しい葉巻の先を焼き、一瞬後、室内に新たな葉巻の煙が渦を巻いた。アタッシュ・ケースを抱えたまま呆然と佇立するリンデックには、タウナーがつきつけた葉巻の火口が銃口に見えた。

火口が大きく流れ、オレンジ色の軌跡をリンデックの視野に焼き付けた。

「出て行け！」

「ターミアの諸恒星区政府首脳は、正統な連邦政府機構の復活を謳いながら、その実、自分たちの身柄と財産の保証の約束を得て、ナイザル・ネレイドと手を結んだ。代償は、“反政府軍”の幹部達の生命だった」

今や「反政府軍」のリーダーとしての立場を……いやいやながらも……とらされているアンリー・シャルブックの声明はターミア諸恒星区政府の肺腑に達した。声明は、同時にデュレーン政府が既に“ザ・ジャービス”の制圧下に入り、リー・タウナーを首班とする新政権が樹立された旨の発表を伴い、他の三恒星区の動揺を誘った。

それ以上に、ラタウを動揺させたのは、婚約者であったレーフラムを喪ったメイリア・トヒユナその人による放送である。

「ターミアの諸恒星区政府ほど卑劣で、信じるに足らない政治組織を、わたしはこれまでに知りません。にこやかに右手で握手していたその左手で、彼らはわたしたちの背にナイフを突き立てたのですから」

虚脱したように蒼白なメイリアの顔色よりも、無理に絞り出すような、そして全く抑揚を欠いた口調が、より効果的だった。ラタウ恒星区のサミュエルソン主席は報道官に声明を出させ、シャルブックやメイリアの声明が“事実無根”であると釈明したが、サミュエルソンにとつて不本意なことに説得力と呼べる一切の要素を欠く“言い訳”でしかなかった。

更に一〇月に入ると、“ナイザル・ネレイドに極く近い筋”からの“確実な”情報として次のような報道が、連邦ニュース・ネットワークに流され始めた。

「サミュエルソン主席とその一派は、政府高官としての地位と現在の財産の保全と引き替えに、ラタウ恒星区の恒星区としての政治的・経済的独立の一切を放棄し、連邦政府の処分に委ねることを申し入れ、連邦政

府もこれを了承した」

“恒星区としての政治的・経済的独立の放棄”とは、ラタウが自ら望んでかつてのコーラル恒星区の立場に身を置くことを受容するに等しい。

「サミュエルソン主席は、彼の判断の責任は、彼を恒星区政府主席に選出したラタウ恒星区の住民二八億人が等しく負うべきだと声明している」

連邦ニュース・ネットワークはそう結び、ラタウの住民の恒星区政府への信頼に最終的な止めを刺した。

事態は、セイモス、シュレニアの両恒星区でも同様だった。“恒星区政府首脳一派と連邦政府の裏取り引き”が連日のようにニュース・ネットワークを賑わせ、ラタウのサミュエルソンだけでなく、セイモスのウィッツイーニ、シュレニアのウィトリ・ルフェールもまた、秘密の特殊地下シェルターに身を潜め、外出時には一個中隊の軽装機動歩兵の護衛をつけるありさまである。

彼らはデュレーン政府：すでにタウナーが主宰するものに変わっていたが：に事情の説明を求め、“反政府軍”の軍事的な代表者としての立場にあるドウルニトウ・ラム元帥が応じてラタウの首都星系ゼムリアを訪れたのが九月一二日だった。

「これは裏切りだ」

サミュエルソンが、甲高い糾弾の叫びで沈鬱な室内の空気をかき回した。

「クーデターを起こし、デュレーン政府を篡奪し、あまつさえ恒星区政府首脳を追放するとは何事か。これは重大な背反行為ではないか！」

「先に背反されたのはあなたがたです、ミスタ・サミュエルソン」

糾弾の矛先を向けられた元帥は、頬の筋肉一筋動かそうとはしなかった。応答の声は、獐猛な唸りに似て低く響いた。

「申し上げたはずだ、軍事への政治の介入は悪いことではないが、正しくない介入は常に悲惨な結果を招く」と

「黙れ！」

「命令であれば、黙りましょう。ミスタ・サミュエルソン。もはや、我々と貴殿等とは話し合える余地はないと理解します。退席の許可をお願いします。小官はここにあっても何の役にも立たない。来るべき連邦空軍艦隊の侵攻に備え、小官のなすべきことをなしたいと考えております」

「逃げるのか、そうだな、逃げるのだろっ？」

「逃げるのは、ミスタ・サミュエルソン、あなたの方ではありませんか？ ナイザル・ネレイドは、あなたを政府高官として迎え入れてよいと声明しているのです。何故、それに応じないのか、小官には合点がいきません」

「バカな、ナイザル・ネレイドは何を考えている？ 我々が何時、ナイザル・ネレイドへの協力を確約したというのだ！」

怒声は、しかし、聞く者をして真実と思わせるには鋭さと、方向性の明瞭さを欠いていた。

本当に怒っているのかどうかも怪しいところだな……とは、ラアムの感想である。

サミュエルソン自身が、実のところはナイザル・ネレイドの連邦政府に叛旗を翻した結果に怯み、おびえている。でき得るのであれば、ナイザルの“声明”をなかつたことにして欲しい、と考えているのである。ラアムの分析は些か以上に皮肉の酸味が強い。サミュエルソンが、ナイザル・ネレイドと五分の裏取り引きができる器なら、逆の意味で“反政府軍”の苦勞は半減していたに違いない。

いずれにしても、ラタウを初めとしてターミア諸恒星区政府の統

治能力には限界が来ている。まだ、本格的な社会不安や暴動が発生しているわけではないが、各有人惑星は、“来るべき連邦空軍艦隊の侵攻”に際し、恒星区政府の許可を待たずして無防備惑星宣言を出す用意を整えている。

“バレルヴァレイ会戦”前、レーフラム・ネレイドはラアムに告げている。

「ファウルスの『両輪作戦』の阻止に失敗したら、ラタウからデューレーンにかけての辺境宙域でのゲリラ戦術しか、対抗手段はないでしょうね」

「しかし補給に問題がある」

微笑い、レーフラムはつけ加えた。

「各惑星から直接に援助を受ければよいのです。ラタウが、第二のコーラルになる、という宣伝はそれなりに説得力があると思いませんか？」

「無償で援助してくれる惑星があるかね？」

「シュレフ・コングロマリットが進出してくれば、最初に狙われるのは地元の中小資本ですからね。それに経済には表があれば、裏がある……」

もっとも、裏の経済……即ち犯罪的な経済組織……と手を結ぶのは余りに危険すぎる。

「むしろ、あてにするべきは、マールク提督……いや、シュネーゼル共和国です。ファウルスは、わたしを戦場で破れば、次にはマールク提督との戦いを望む。そして、シュレフ・コングロマリットもより巨大な市場である共和国を狙うでしょうから。今次の戦役でファウルスを葬れないとすれば、次の戦役は、最後の戦役はレーフルとマールク提督との間のものになるでしょうね」

どうも最悪の予想通りにことが運びつつあるようだ……

元もと瘦身の元帥だが、ここ一、二カ月以内に更に頬の肉を失っていた。「悲劇はもう十分だ……」。レーフラムとメイリアにそう語ったのは、まだ三カ月余り前のことでしかない。生氣と呼び得る一切を失ったようなメイリアの姿は、剛毅さで知られた元帥でさえ正視に耐えないものだった。おそらく、メイリアはこれからの一生の内、かなりの期間、笑顔を喪ったままで過ごすことになるのだろう。

やや頬が瘦けたように見えるものの、かつてラタウ恒星区の有権者を魅了した端正さを些かも損なったように見えないサミュエルソン主席に、ラーム元帥は寛大な気分にはなれなかった。

「退出の許可を頂けた、と理解しますが」

「衛兵！ラーム元帥を退出させるな。ターミアを裏切るつもりだぞ！衛兵！」

もはや一顧だにする必要を認めず、ラームは厚い装甲とコンクリートに包まれた閣議室を退出する。

「そこをどき給え」

サミュエルソンの悲鳴に応じてラームの進路に立ちふさがりかけた数名の衛兵を、ラームは一喝する。

「そして、もし諸君らが連邦のために自らの力を尽くしたいと考えているのであれば、諸君らのいるべき場所はこちらではない。もし、わたしと共に戦いたいのであれば、わたしと共に来給え。もし、一身の生命を保全したいのであれば、わたしを止めるのは愚かな行為だ。選ぶがいい」

六人程の衛兵の内、ラームの前に立ち塞がりかけていた二名が銃を下げた。視線を交錯させ、一人が質問する。

「ナイザル・ネレイドがラタウを植民地化するという噂があります

が……」

「半ばは事実だろう。いずれ、彼がターミア宙域の鎮圧を試みるのは自明と言っている。それも我々が思っているよりもはるかに早い時期にだ」

「元帥は……どうなさるのです？」

「ナイザル・ネレイドに膝を屈するつもりはない」

返答は単純だった。

「わたしは四〇年ばかり連邦空軍に籍を置いた。少なくとも建前上、連邦空軍は市民を守るための軍隊だったと多少は自負している。私自身の矜持と、かつて連邦であつたなにかをわずかも救つつもりだ」

三人が銃を引き、残る三人が元帥の前に進み出た。もっとも、それが進路を妨げるためのではないことを、ラームは悟っている。

領き、歩を進めるラームの後を、最初は三人が、そして間もなく、残る三人も元帥の後を追った。

「何様だと……思っているのだ、一介の軍人の分際で……」

軋るような声で罵つたのはセイモスのウィッツイーニ主席だったが、言葉に力はなかった。彼らの視野にも閉ざされつつある彼らの故郷の命運がはつきりと映っていたのだから。極く近い将来にレーフル・ファウルス・ネレイドの率いる連邦空軍の大艦隊がターミア宙域に雪崩れ入ってくる。四〇億近いターミア宙域の市民は連邦憲法典の保護を失い、かつてのコーラルと同じ境遇に突き落とされる。そして、彼ら三人と、すでに追放されたリンデックとは、四〇億の市民とその子孫から将来を奪った愚か者としての汚名を歴史に刻印されることになるのだ。

ウィッツイーニに言葉を続ける者はなかった。何かを口にしようとする旅、交わし合つた視線の奥に露骨な打算の色を見いだして口を噤む。ウィッツイーニが立ち上がったのを機に、恒星区政府主席とその随員た

ちは次々に席を立つた。それと宣言されたわけでもなかったが、諸恒星区連合評議会は閉会され、そして二度と開かれることはなかった。五七四年初頭に設立されてからわずかに数ヶ月。ターミア諸恒星区連合評議会は、銀河系大戦という巨大なうねりが生みだし、直ちに消え去った歴史の泡沫として水面下へと没し去ったのである。

翌九月二三日、デュレーン恒星区政府臨時元首となったりー・タウンーは宣言を発する。

デュレーン首都郊外の競技場のグラウンドに居並んだ人々の数は決して多くはなく、スタンドにも空席が目立つたが、演壇に立つたタウンーは昂然と声を張り上げた。

「今や連邦が共和国かという選択は無意味なものとなった。あるのはナイザル・ネレイド支配下の銀河が、彼の霸王の手の及ばぬ銀河かである。我々は、非ナイザルの存在と手を携える準備がある。敢えてナイザル・ネレイドを打倒するとは言わぬ。しかし、わたしとわたしの仲間たちは誓う。各自にとつて最も神聖な存在に賭けて誓う。わたしとわたしの仲間たちは戦う。ナイザル・ネレイドに代表される単一の価値観による支配を免れるために、デュレーンの前で戦う。デュレーンの中で戦う。そしてその後背で戦う。どのように不利な立場に陥ろうとも、霸王の手によつて我が生命が断ち切られるまで、わたしは戦う。そしてわたしの仲間たちは戦い続ける」

“悲壮すぎる”と評した声もないではなかった。まるで最初から敗北を覚悟したかのような内容ではないか、と。“実際に不利なのだ。虚勢を張つても得るところはないぞ”。それがタウンーの返答だった。

「わたしは夢見る。そして信じている。銀河は唯一の価値観にしか勝利者の祝杯を与えないほど狭量ではないことを。わたしは夢見る。そして固く信じる。銀河は多様であり、多様であるからこそ美しい。敢えて困

難に挑み、はるかな星々の海の中に旅する価値は、まさに様々な世界がそこに待っていることにこそ由来する。ただ一人の覇者によつて押さえつけられて刻を閉じられた世界は、一時たりとも留まらず、永遠の時の中に絶えず変わりゆく世界の足許にも及びはしないのだ。わたしは夢見ている。そして、心から信じる。ナイザル・ネレイドは、支配するべき存在かも知れないが、彼の支配するべきものがこの銀河すべてではないことを。われわれこそが、それを証立てる日がかならずやってくるだろうことを。いつか、わたしたちの仲間が、勝利の歌を高らかに歌い上げるであろうことを。

諸君、わたしとともに夢見、信じてくれるだろうか！

歓声はなかった。

静かだった。

わずかな咳払いと身じろぎのざわめき。それすら、スタンドを吹き抜けていく風の音がかき消していく。耳が痛くなるような静寂が続き、そして……

「……？」

それは最初は小さな唸りに似ていた。

それは拍手だった。

最初は数人。数人が十数人になり、そして数十人、そして数百。ついにはすべての聴衆が立ち上がった。立ち上がつて一斉に拍手をし始めたのだ。拍手はグラウンドを満たし、スタンドに及び、中継を見ていた街頭の人々に、そして居間で3DTVを前にしていた人々に広がっていったのである。

タウンーの頬に血の色が戻り、演壇の上で、老虎を思わせる風貌の元連邦大統領はわずかに天を仰いだ。

「諸君」

(二)

再びタウナーの声が風の音を圧し、あらゆるメディアに乗ってデュレーンと、デュレーンを含むターミア宙域の有人惑星を駆けめぐり始めた。

「いまや戦いのラッパが鳴っている。新たな戦いを告げるラッパである。いずれ、この音が戦いではなく、果てしないフロンティア、彼方の宇宙への飛躍と我が内なる平和への挑戦を告げる戦いへ我らを誘う日が来るであろうことをわたしは確信する。そして、諸君が人類の次代のための重荷を喜びを持って担うであろうことをわたしは確信する。」

最後にわたしは敢えて言つ、敢えてその言葉を口にする。

祖国よ、万歳！」

この日、デュレーン政府は複数の外交使節派遣を決定する。二つは危険を承知の上で連邦圏中枢部へ向かう。目的地はセリア恒星区とエルメティア恒星区。そして最後の一つは連邦圏の外側……恒星系ウィルワの惑星シュネーゼルである。

「ひつどいねえ、これって……」

「コーティこと、コーティリア・バードフェザーは、それが癖の、首を振って前髪を左右に振り分けると確認する口調になった。肩までの、緩くウェーブのかかった黒い髪と、黒目がちな悪戯っぽい瞳の持ち主であり、一見少年のような雰囲気の小柄な女性である。」

「政治家は一つの国を導いていく立場にあるわ」

アリシア・ミツケルは手にしたボールペンでデスクを軽く叩く。こちらは豊かな黄金色の髪、均整のとれた長身の所有者。共和国暦七二年七月一四日に独立を宣言してから約一年余りを経過した新生の共和国……シュネーゼル共和国の初代大統領、それがアリシアの肩書きであり、一方のコーティは首席秘書官からいつの間にか首席補佐官に肩書きを書き換えられている。

アリシアは女性としてだけでなく、ル・ラント人の標準から見ても十分以上の長身。学生時代からスポーツ万能で、レイヴェルゲン大学ではトップ・チャ・リーダーとしても活躍していた。すっきりと引き締まった均整の取れた長身は、伸びやかな肢体をむしろスリムにさえ見せていた。大学時代についたあだ名は「鋼の淑女」。

一見して勁烈な知性の所有者であることを印象つけるアリシアはともかく、どこことなく悪戯好きの、それでいて人に馴れない野生の猫を思わせるコーティリア・バードフェザーである。彼女の肩書きが首席補佐官であると聞かされた人々の反応は二様に分かれた。

一つは、「シュネーゼル共和国などと言っても、所詮は女子供のこつこに過ぎない」と軽視する一派である。そして、今一派は、「ミス・ミューツ

ケルが重用するからにはそれなりの手腕の所有者に違いない。考えてみれば、マールク提督にしても、見た目であれほどの軍事的天才にはとても見えないではないか……”と受け取っている。いずれにしても、コーティア・バードフェザーがシュネーゼル共和国政府内部で確固たる立場を築き上げるまでには、今少しの時間が必要なようだった。

「別に立場なんていらないけど……」

当の本人の言葉である。

アリシアの方も、彼女を大統領閣下と呼ぶ市民は少なく、“ミス・ミュツケル”が通称である。

ただし、アリシア自身の反応は大幅にずれている。

「ミス・ミュツケルのままお婆さんになるのも考えものね」

それが真意なのか、それとも単なる韜晦なのか、彼女の双児の弟であるネイス・ミュツケルにも分からない。

執務が途切れるのを待ってコーティがお茶の時間にすることを提案し、アリシアもそれに同意する。シュネーゼル共和国首都星シュネーゼルの首都クローネンポリス大統領府。

独立宣言から、共和国暦で一四万月余り。旧共和国政府首脳を最終的に葬り去り、シュネーゼル共和国がル・ヨント圏で唯一の政体となつて約半年。些か武断的な方法によつたとはいえ、旧共和国母星を覆つていたいわゆる“中世的停滞”もかなりの部分が吹き払われ、シュネーゼルの移住する共和国市民の数も次第に増加しつつある。アリシアが手際よく打ち出していった社会安定のための施策が功を奏し、共和国圏を構成する主要な四つの有人惑星……シュネーゼル、ル・ヨント、ドレド、そしてエムス……の内、シュネーゼル、ドレド、エムスは日に日に安定の度を増しつつある。

“国を導く”云々のせりふに、コーティが胡散くさげに鼻を鳴らした。

「つまり、いろんな可能性を常に目に入れておけることが必須の資質ね」
「だから？」

「右手で殴り合いながら、左手で握手するなんてことも平気でなければならぬことよ」

「アリシアあ、それってさ、二またかけるって言わない？」

「そうも言っわね。二またかけた両方に喧嘩させずに、うまく操る……なんて考えたらダメだけれどね」

アリシアは笑いを収める。コーティが手にしているのは“ネレイド兄弟戦役”の報告書だった。いわゆるターミア辺境宙域の四恒星区……ラタウ、デュレーン、セイモス、シュレニア……の恒星区政府首脳の黙認の元に、“ザ・ジャービス”へ潜入していた連邦空軍の特殊工作員たちが果たしたとされる役割を報じるものだった。

“ネレイド兄弟戦役”の掉尾。“バレルヴァレイ宙域会戦”末期、レーフル・ファウルス・ネレイド麾下の連邦空軍艦隊を完全に圧倒していた“ザ・ジャービス”艦隊。その彼らの死命を制したのが、これら特殊工作員による裏切りだった。“ザ・ジャービス”艦隊の旗艦『ベルセウス』を襲った、致命の一撃は味方のはずの戦艦から放たれたものだった。そして、実質的に“ザ・ジャービス”の軍事的成功のすべてを演出していた天才参謀レーフラム・ネレイド少将も『ベルセウス』と命運を共にした……とされる。

少なくとも連邦政府はいち早くそう発表した。

“このナイザルって人、嫌いだな”

コーティの感想はストリートを極めた。

ナイザルは四恒星区政府の“裏切り”を口を極めて誹謗する一方で、レーフラム・ネレイドの戦死を恒星区政府首脳の“連邦への偉大な貢献”と賞賛していた。

「裏切らせておいて、なにさ」

「つまり、ターミアの恒星区政府首脳はいいように弄ばれたのね」

アリシアの批評も身も蓋もない。

「世間知らずのお嬢さんみたいにね」

「……？」

「プレイボーイに騙された挙げ句にあっさり捨てられたってこと」

「つんとにアリシアって口悪いねえ」

「コーティは呆れたようだった。」

「育ちが育ちだもの。しょうがないわ」

彼女の言葉は完全な嘘ではない。

彼女の弟を苛めた悪童どもは“お転婆アーシャ”が猛烈な勢いで繰り出す悪罵の機銃掃射で穴だらけにされたものだ。その上、アリシアは口より手が早い。たいていの場合、悪童たちは腫れ上がった頬や、強かに蹴飛ばされた腹部を押さえてのたうち回りながら、“お転婆アーシャ”の啖呵を聞く羽目になった。

「話を整理しましょう、コーティ……」

アリシアは指摘する。“戒厳令”という法律上の魔法の杖を揮って連邦を襲撃したのはレイフレム・ナイザル・ネレイド元上院議員だという。

「どうして戒厳令が“魔法の杖”なのさ、アリシア？」

「そこが奇妙なところだけどもね……」

“法的な合圍状態”、あるいはしばしば“非常事態宣言”と呼ばれるこの超法律は、実際、旧共和国憲法に規定はなかったし、おそらくシエルメス連邦にもなかっただろう。国家組織が非常な混乱状態に陥った際に、軍事的、あるいは政治的指導者によって発令されるこの法規は、どちらかといえば不文法、慣習法に属する。その発令の対象となった一定の地域では一切の既存の法律が停止され、任命された最高司令官……即

ち戒厳司令官が事実上の独裁権を与えられ、統治の人に当たるとされている。

「……ということになってるんだだけどもね」

とアリシア。再び、ボールペンでデスクを軽く叩き、ティー・カップに手を伸ばした。熱いミルク・ティーを啜るアリシアを横目に、コーティは蜂蜜入りの熱いミルクを口に運んでいる。

「実際のところ、独裁者が勝手なことをするためにとか、軍隊がクーデターで奪った政権を既成事実化するためとか、それともシエルメスみたいに正当な手続きによらない政権移動のためとか……結局、ろくなことには使われていないのは確かだね」

「ドレドだって、戦役の後はずっと戒厳令みたいなものだったって聞いているよ。それに、なんだっけ？ 治安監察法？ あれだって似たようなものだよね」

ミルクが少し熱すぎたのか、コーティは顔をしかめて口元に手をやる。決してそうではないのだが、彼女のあだ名“チェシャ”、または“チェシャ猫”のためか、“コーティの猫舌”という噂が絶えないのをアリシアは思い出し、僅かに表情を緩める。

「……でも、だからって、アリシアはナイザル・ネレイド元上院議員のシエルメス連邦を敵に回すつもりはないんでしょ？」

「どうしてそう思うの？」

最近のアリシアは、雑談に混じえてコーティの意見を問うことが多い。訝しがる弟のネイに、アリシアは言ったものである。“素質があるのよ、あの娘にはね。いずれ、わたしを蹴落とすくらいの政敵に育って欲しいところね”と。

「ええと……」

ミルクをもつ一口啜って、コーティは目を細める。コーティは指摘す

る。ナイザル・ネレイドは纂奪したかも知れないが、纂奪された結果としてのシエルメス連邦の統治は、いまのところ公正である。

「纂奪……だっけ？ 纂奪がいけないって言うのも論理だけど、纂奪される側がいつも正しいって保証もないしね。現実には、ちゃんとした政治をしているんだから、引き継ぎ方が正當じゃなかったからって攻撃はできないと思うよ、アリシア。あたしたちだって、ほとんどクーデター政権だもの」

「それは言えるわね。で、あなたとしては取り立ててシエルメス連邦と敵対するべきじゃない……そういうことなのね？」

「コーティ、頷く。」

「敵対したら戦争が続くじゃない。もう十分戦争した。違う？」

「違うないわね、確かに……でも、そうも言うてられないようによ」

アリシアは端末を操作して数通の書類を表示させた。

“『コーラル戦役』の終焉を告げた演説と相前後するようにして、ファンデルフェルト連邦銀行“ターミアおよびユロノス辺境領域担当”執行責任者サイモン・ノウランからのコンタクトを受けたのだ。

コンタクトは書簡。そして長いものではなかった。

『連邦は連邦暦五六九年の段階の連邦圏を以て、連邦が正当な権利を有する領域であると認識している。ファンデルフェルト連邦銀行執行責任者の一名として、本職は貴国政府に対して、当該領域での連邦空軍によるいかなる軍事行動も、連邦圏内部の治安を維持するための、いわば警察行動であるとの認識を共有されることを要請したい』

「微妙な表現ね」

評した後、おとがいを軽く摘んでアリシアは結論つける。二重三重に考えられた内容である。

「つまり……連邦空軍はごく近い内にターミア宙域の平定を開始する。」

これが一つ」

その時に、共和国がターミア宙域の恒星区に手を貸せば、“内政干渉である”と反駁する……だけでなく将来の共和国圏侵攻の口実とするかも知れない。逆に、それを恐れてアリシアが軍事行動を制約すれば、連邦空軍は易々とターミア宙域を制圧する。

「そうやって旧の連邦圏を回復し終われば、今度は共和国圏ね」

「なんで？」

「つまり……どちらにも解釈できる、ということ、彼らはわたしたちの誤解を狙っている」

連邦暦五六九年の段階の連邦圏がヴィルワ・シュネーゼルを含むか否かを、この書簡は明瞭に示していない。五六九年末にはヴィルワ・シュネーゼルはル・ヨント共和国宇宙軍の勢力圏下にはぼ入っていた。しかし、実際には“ユラフの会戦”から“ユラフの滞陣”を経てコーラル動乱が起こるまで、シュネーゼルでは両国勢力が伯仲していたとも言える。「わたしたちが手を出さなくても、シュネーゼルが正当な連邦圏であることはこの書簡で宣言してあったはずなのに、不法な占領を続けていた」と口実を構えて侵攻してくる……かもね」

「きつたない！」

「コーティは思いっきり顔をしかめ、アリシアは巧まざる優雅さで肩を疎める。」

「なにか都合が悪くて書簡そのものを破棄したくなったら、あれは民間企業の幹部が独断で送った内容に過ぎないから、連邦政府は責任を負えないってこれも口を拭えるしね」

「ねえねえ、アリシアさあ」

苛立たしそくにコーティは軽く足踏みする。

「どうして、そこまで裏読みするのさ。気分悪くなんないの？」

「あら……」

ちよつとびつくりしたようにアリシアは目を瞪る。

「あなただつて読めてたでしょ、コーティ」

「そりゃ、アリシアと一緒に仕事してんだよ。自然にそれくらいは習っちゃうよ。でもさ、こんな美人がこんなどろどろした裏読みしてるなんて、普通は思わないんじゃないの？」

「褒めてくれても何も出ないわよ……まあ、読んでおいて読んだ通りになつたら“やつぱり”で済んで、ちよつぱり気分が悪いで済むわね。でも、読んでおかなくて背負い投げされたら、大変じゃないの。わたし一人だけのことなら、泣きを見るのはわたし一人で済むけれどね」

一国の元首の誤算は共和国圏数十億の市民を、滅亡の淵にいとちよつぱり蹴り込むことができるのだ。

アリシア曰く、政治家のこれが責任と。

このノウランなる人物の裏にはナイザル・ネレイドが隠れている。アリシアは一点の疑惑も抱いていない。

話を複雑にしているのは、時期を同じくしてコンタクトをとってきたユナイテッド航宙保障“フロンティア航路事業部”担当上級副社長カール・クレインなる人物だった。クレインは、“ザ・コンテス”のミライユ頭領を経由する形でシュネーゼル共和国の財政責任者との直接的なコンタクトを求めてきた。

惑星エムスの衛星軌道上で会見に応じたオレーグ財務長官：かつてのドライバオム要塞兵站監：は、ユナイテッド航宙保障からの提案を持ち帰ってきた。曰く、共和国圏からターミア宙域に至る航宙保険と共和国圏の恒星系での鉱山事業への参入許可要請であり、同時にマールク艦隊による航路保全を要請するとともに、共和国政府へのロイヤリティとして売上の一五パーセントの提供、および共和国圏に籍を置く企業体とし

ての納税義務の遵守を条件として提示するものだった。

「投資してくれて、税金を払ってくれて、手数料まで収めてくれるってことね」

「プラス・マールク艦隊に優先的に護衛してほしいからよろしく、だよ」

これ以外にも、それとははつきり示されていないが明らかにシュレフ・コングロマリット系の銀行資本が、本格的にシュネーゼルへの資本参加申請をアリシアの元へ提出してきていた。

「つまり、意見が割れているのね」

アリシアはそう読んでいた。連邦政府や連邦空軍と異なり、シュレフは民間企業体。それも膨大な数の企業組織の連合体である。個々の企業体はそれぞれの利益を最大目的として活動する。その方向が常に同一であるという保証はなく、むしろ一致していない方が自然である。

つまり、シュレフに代表される連邦圏の経済組織は、互いに相反する対共和国戦略を抱え込んでいるのだ。一つは政府・連邦空軍の意向に従ってル・ヤント圏を完全に征服・併呑する考え。

「つて、アリシア！」

「コーティは小さく悲鳴を上げる。

「連邦がル・ヤント圏をへ、いどんするつて？」

「はいはい落ち着いて、コーティ。お茶が冷めちゃうわ」

「お茶つて……」

「このノウランつて人の書簡はすごく政治的な臭いがするわ。でも、このミスタ・クレインやその他の動きは純粹にお金儲け狙いね」

「つまり、ミスタ・ノウランは政府つてか、ナイザル親爺の代理人。ナイザル親爺はシュネーゼルからあたしたちを追いつつもりであれこれやつてること？」

アリシアは軽いため息を付く。蒼緑の瞳が冷たすぎるほどに怜悯な煌めきを帯びるのに、「コーティはちょっと背をびくつかせた。」

「シュネーゼルから追い出されるだけなら良いんだけど」

「……」

「王様になりたいのよ、このミスタ・ナイザル・ネレイドは。銀河系の王様に、ね」

「王様……？」

「そつ、王様」

補佐官用のデスクが電子音を響かせる。ミルクのカップを置いたコーティが、アリシアを振り返った。

「マールク提督よ、アリシア。お会いしたいって」

「お一人？」

「ネイ……じゃないや、ミュッケル提督とラング提督が一緒」

「お通しして」

クローネス・マールク元帥。ル・ヤント宇宙軍の軍事的成功のすべてを象徴する人物である。もつとも、実際の彼はおさまりの悪い茶褐色の髪と、茫洋とした濃い灰色の目を持った、極くありふれた青年でしかない。決して背の低い方ではないが、女性としては長身のアリシアと並ぶと、相手の肩を自分のそれと同じ位置に見いだすことになる。

「残念ながら、そろそろ青年という年齢でもないんだけどねえ」

とは本人の弁である。共和国暦六九一年に、平凡な一官吏の長男として生まれたマールクは、この年で三三歳になるうつとしている。

ネイス・ミュッケルは……既に述べたように……アリシア・ミュッケルの二卵性双生児の弟で、鞭を思わせるしなやかな長身と、柔らかな色調の金髪の所有者。エメラルド・グリーンの瞳は穏やかで、マールクとは別の意味で余り軍人らしく見えないのも事実だった。“ドレド戦役”

と呼ばれたル・ヤント圏の内戦でマールクに見いだされ、以来、ミルクの最も信頼する副将、そして友人としての位置にある。

今年三二歳になるファートウリック・ラングはブラウンの髪と口髭を蓄えた紳士で、マールク艦隊の首脳中では最も教養豊かな軍人として知られる。マールクやミュッケル同様、彼も志望して軍人になったのではなく、“ドレド戦役”なる偶発事が、運命の姿を借りて彼の背を蹴り飛ばした結果だった。元もと天体物理を研究する研究者の卵であり、現在もシエルメスの惑星改造技術に大きな関心を寄せている。

一日、アリシアにドレドの気候改造の可否を問われたラングは応えている。

「シエルメスの惑星改造技術とは、要するに重力制御のシステムを利用して、マントル対流の動きを制御するものなのです。重力制御の技術はすでにル・ヤントでも実用化されて久しいですが、これは言ってみればコロンプスの卵に近い発想の転換に基づく新技術です。ただし、改造システムを制御するためのスーパー・コンピュータのシステム、更に大気改造と植生改造のためのバイオテクノロジー、移民と入植のための農業技術など、ル・ヤントではなかなか太刀打ちできない技術もありますが、これらとて一〇数年もあれば十分に追いつけるものです。」

ドレドの気候改造もさして困難とは思えませんが、無論、シエルメスの技術に依存することにはなると思いますが。一〇億からの人口を他の惑星に移動させる時間と費用を考えるなら、ドレドの気候を緩やかに改造させる……というか、破壊された気候を元に戻すための作業ですが……これを実施した方がより現実的でしょう」

彼らの他、ベイ・ドレスン、セルティ・マックス、レイトウラント・シャブリ、メル・ヤンデキフィティの四人の中将が、事実上、マールク艦隊の最高司令部を構成している。かつて“マールク艦隊の七提督”と

呼ばれていた内、ヒースクリフ・ローナクは“前期銀河系大戦”末期に戦場に斃れている。

彼の他にも、“ドレド戦役”からのベテランだったドウリユー・ラ・マーク少将、マークの副官だったクリス・ローク中佐らの姿もない。開戦以来、連邦空軍を常に圧倒してきたとは言え、数百万の将兵の生命を代償として差し出さなければならなかったマーク艦隊である。ネイス・ミュッケルでさえ、“ミットリッフェル宙域会戦”では旗艦『ドレスト』を撃たれ、飛来した破片にわき腹を刺される重傷を負っている。「どうなさったの。まさか連邦空軍艦隊がいきなり攻めてきた、なんてことではないのでしょうか？」

訪れた三人の提督にも熱い紅茶を勧めてから、アリシアは形のいい両手の指を組み合わせる。蒼緑の瞳が、悪戯っぽい表情を含んでいた。

「コーラル艦隊がね、攻めてきたんです……というのは冗談ですが、デュレーン恒星区政府の名前で特派派遣の打診が来ました」

「デュレーン政府？」

アリシアの眉が動いて光を弾く。

「代表者は？ミスタ・リンデック？」

「ミスタ・リー・タウンナー。特使として派遣を予定している……と言つか、すでにエムスあたりまで来てしまっているそうなんです」

特使の名を聞いて、コーティが目を丸くした。慌てて視線をアリシアへ向け、それからマークへと移す。

「どうして？」

「クーデターですね。例のミスタ・ナイザル・ネレイドの演説の後、電光石火でデュレーン政府の首脳を追放してしまつたらしい」

「そつ、やつぱりね」

おや、という表情でマークはアリシアを見直す。アリシアは笑い、

マークの予想の内にもターミアの恒星区政府のいずれかでクーデターが発生する可能性が織り込まれていたはずであることを指摘する。「ナイザルという人はやはりル・ラント圏の征服を考えているんじゃないか」

「わたしはそう思います」

厄介な相手、とアリシアは言う。過去無数に現れ連邦と共和国の歴史を緋色に彩った単純な権力亡者、あるいは独裁志向の権力者と、このナイザルは微妙な一線を画している。

「わたしたちが無抵抗であればあらゆる口実を設けて抵抗させようとし、抵抗すれば自らの敵対者として葬る。最初から敵対すれば、それを口実にして征服を試みる。しかも、障碍が強ければ強いほどそれを撃ち破ることに情熱、というかまあ負の情熱を燃やす……そういうタイプなんじゃないか。案外、マーク元帥、あなたやわたしに向かつて『お手並み拝見』っていう気分なんじゃないかしら」

「え、つ、それってひょっとして『誰か私を止めて』ってやつ？」

「ちよつと違うわよ、コーティ。むしろ『止めてみやがれ、この俺を』というところね」

「変な奴！」

表現はおかしいがコーティの批評は当たっている。ナイザルの目的は権力を握ることではなく、自らが全銀河の覇者たるにふさわしい強者であることを証明することにあるのではないか。

「そいつはまた……」

参つたな、とマークはつるりと顔をなで上げるが、彼の分析もアリシアとほとんど一致している。

「それでデュレーンの使者？」

「この人物です」

(三)

差し出された通信プレートを目にして、アリシアの表情が初めて変わった。

アリシアが視線を上げると、マールクは顔に浮かべていた、ちょっといたずらっぽい表情を消した。

「お会いになりますか、大統領？」

「会いましょう」

アリシアは頷いた。

戦艦『ミュトレイ・ロメイチェフ』のエア・ロックが開いたとき、出迎えた一同からは押さえ切れぬどよめきが上がった。

極く小柄な人物。結い上げた髪は透き通った銀色の光を帯び、身に纏った簡素なスーツまでが淡い光の霧を帯びているように見えた。ゆつくりとした歩調、かすかに左脚を引きずるようにして、その人物は出迎えの一同の前に歩み寄り、そしてアリシアの前で優雅に一揖した。

「初めまして、ミス・ミュツケル。メイリア・トヒユナです」

「遠いところをありがとございました、プリンセス・メイリア。シュネーゼル共和国はあなたを歓迎します」

薄く微笑ってメイリアはアリシアの歓迎を受け入れた。彼女をよく知る人なら「プリンセスという呼び方は避けて下さらない？」という応答を期待したかも知れない。が、この時の彼女は、『シグナ・フォース』号に搭乗して以降の彼女しか知らない者がその場にいれば意外の思いを免れなかったに違いないほどの無表情。無邪気すぎるくらいの微笑が、それ以外の一切の表情を消し去っている、かつてのメルティアの白亜宮の住人特有のボーカールフェイス。

「では、こちらへ……」

メイリアのエスコートに立つたのはむやみに長身で、手も足も持て余すほどに長い高級士官である。

「マールク艦隊には、特に親衛隊であるとか、専任の衛兵であるとかいう者はいないので、プリンセス・メイリア」

翻訳機を介してさえメイリアが驚くほどの早口のその士官は、極く簡単に自己紹介を済ませる。「セルティ・マックス中将です」の一言。

「その時々で手の空いている士官が、こつこつ役を仰せつかります」

こくと頷き、メイリアは自分よりも確実に頭三つ近く背の高い士官の案内に従う。量産型の戦艦らしく、殺風景なほどに装飾を欠いた通路に、マックスとメイリアの足音、そしてメイリアがついている杖の音が反響する。メイリアの左足は、まだ十分には回復していなかった。

戦艦『ネーベル』は、先代の旗艦『ジェレスエン』が「第二次ターミア辺境宙域の会戦」で没してから以後、マールクの旗艦としての地位にある。その『ネーベル』の中央作戦会議室が会談場にしつらえられていた。

「ミスタ・タウナーはシュネーゼル共和国との協力を要請しています」
会談場でのメイリアの第一声がそれだった。

この時の彼女は、依頼の言葉を発したときのタウナーの表情を思い返している。

……こんなことを頼めた義理ではない……拒否されても仕方がないと思つとるよ。

洪すぎるくらい洪い声だった。

レーフラムを失い、その遺体への対面すら“政治的理由”を盾に拒絶された時、メイリアは、少なくとも歴史の動きというもののへの積極的な感心を喪ったと思った。その自分を動かしたものとすれば、タウナーのあの言葉だったかも知れない。

……わしは戦争を止めたい。止めねばならんと思つている。

「ナイザル・ネレイドは……」

微かに語尾が揺れ、浮かべ続けていた微笑が強まる。

「連邦圏を平定し終えれば、必ず共和国圏へ目を向けますが、さしあたって

ではターミア宙域の問題は内政問題だと言い立てて、貴国に中立意地を要求するはず。そしていったんデュレーンを含むターミア宙域が全て彼に屈すれば、共和国は単独でナイザル・ネレイドの連邦政府と、レーフル・ファウルス・ネレイドの連邦空軍に立ち向かわなければなりません」

すでに連邦空軍の艦隊兵力は三万を超えるレベルにまで回復している。ターミア宙域平定にあと半年。その間に連邦空軍はさらに二万隻以上の新規兵力を傘下におさめる見込みだった。しかも、いわゆる“ポスト・アルヴェスタ”クラスの新造艦艇がその大半を占め、個艦レベルでの性能でも、連邦空軍はル・フォント宇宙軍を圧倒するに至るだろう。

「共和国政府は、来るべきターミア宙域への連邦空軍の攻撃に対して、デュレーンと連携する用意があります」

アリシアの言葉にびつくりした者がいたとしても、それはごく少数者だっただろう。さすがにコーティ・バードフェザーは目を丸くしたが、すぐに先日のアリシアとの会話を思い出してこくりと頷く。

逆にメイリアの方が意外そうに目を細める。滅多に見せない、メイリアの猜疑深げな視線だった。

「駆け引きはないんですか？」

「そんな場合ではないですからね。でも、ただじゃ駄目。条件を聞かせて下さいな、プリンセス」

無表情な微笑が初めて表情らしいものを浮かべた。

のちにメイリアは書いている。“どうしてこの人たちと戦わなければならなかったのか、幾ら考えても分かりませんでした”と。

「メルティア・スルフエイク侯爵との仲介をする用意をしました」
「スルフエイク侯爵？」

メルティア王国……連邦圏で唯一政治的な独立を維持している宙域で

あり、領有宙域のサイズから言えば小国だが、三つの点で連邦圏への影響力は小さくない。

「連邦の発祥の地です。昔の万世一系の王室ではありませんけれど、それなりに精神的な影響力は無視できません」

戦争マシンと化して戦争に国力を注ぎ込み、コーラル動乱からナイザル・ネレイドのクーデターを経て、さすがに疲れの見え始める連邦社会に対して、メルティアは“第二次メルティア紛争”以外は戦争には関与してこなかった。“第二次メルティア紛争”からの復興で、連邦から莫大な資本が投下されたことも相まって、メルティアは急速なまでの経済的復興を成し遂げてきている。加えて一〇億近い人口は連邦圏の一個の有人惑星としては最大級であり、市民の教育レベルも高い。

「それとメルティア……エルメティアの地理的位置です。セリア恒星区、シュレジエン恒星区の存在もあります」

メルティアの属するエルメティア宙域は、連邦圏のちょうど中央部。そして、過日の“ザ・ジャービス”との取引によってヒューロザイオン宇宙要塞の管理権まで入手している。管理権を共有するヒューロザイオン要塞の扱いを巡って、メルティアとセリア、ひいてはヒューロザイオンの位置するシュレジエン恒星区は連邦圏を二分する。ヒューロザイオン宇宙要塞の管理権は巨大な現金収入をメルティアにもたらしたほか、“万一にもメルティアに背かれては連邦圏そのものが危ない”という危惧を、連邦政府に抱かせるに十分だった。

「デユレーンからメルティア経由でセリアまで手を伸ばせというのね。それに手を貸してくれる？」

「貴女方も戦争を止めたいのだ、と信じていますから」

スルフェイク侯爵を経由しての和平工作はそれなりに効果を上げるかも知れないが、民衆レベルでの和平への要求を連邦という国家の政治行

動に転化させるためには、国家の最高指導者と市民の間に恐怖という触媒を作用させなければならない。

「……難しい表現だねえ」

小さく呟いたのはコーティだった。共和国政府の要人の中でコーティ以上に連邦公用語を直接理解できるのは、カシニー・ローゼン外相だけだが、そのローゼンでも完璧に連邦公用語を使いこなすには至っていないだろう。

翻訳機からの通訳を聞き直し、コーティは理解を示して頷いた。

「分かる……それって、マールク提督がやったみたいに脅かしをかけるんだよね。でも……」

「どうやって？」

コーティの台詞を引き取ってメイリアは微笑う。冷やりとするものを感じて、コーティは相手の顔を見直した。この時期のメイリアの微笑を表す言葉、“氷をまぶした微笑”を残したのはコーティではない。が、その表現に異議を唱える気には、コーティはならなかった。

レーフラムを失ったショックは癒えるどころか、ますますメイリアの心を深く侵食しつつある……コーティがメイリアを個人的に熟知していたならば、一見塞がったかに見えるメイリアの心理的な傷口の直下に広がっている亀裂の深さに気づいたことだろう。が、コーティ自身が自らを顧みて評した言葉、あるいは第三者からのコーティの批評の中には、残念ながら心理的な洞察に長けている……というものはない。

「何かが用意をしてきて下さったと期待しているんですけど？」

アリシアに向かって、メイリアは頷いて見せた。

「余りやりたくはないんですが、用意はする、と」

「どのようにな？」

「“ザ・ジャービス”」

「ザ・ジャービス」？」

「スルフェイク侯爵が了解してくれば、ですが」

「ザ・ジャービス」を？」

「彼らももう直接の戦いには疲れすぎています。将来のあてのない戦いを続けるには、でも、敢えてやる価値がある。シャルブック提督以下は同意しています」

会談には多くの日時を要さなかった。

メイリアとアリシア、およびローゼン外相を交えた会談は丸一日半。

この会談で両者……シュネーゼル共和国とデュレーン恒星区……が合意に至った内容は間もなく明らかになるのだが、メイリアがマルクとの私的な会見を求めたのは連邦暦九月一五日。

「軍人がむやみに外交に口出ししてはいけないし、わたしの意見はミス・ミュッケルに十分伝えてあるから」

と会談の席に連ならなかったマルクだが、メイリアからの会見の求めには喜んで応じた。

読書家……というよりも乱読家……として知られるマルクだが、旗艦の私室にはさして多くの書物は持ち込まれていない。マックス中将に案内されたメイリアが一步、司令長官私室に踏み入れたとき、マルクは厚い歴史書らしいものを閉じながら立ち上がった。

メイリアの碧眼に映ったマルクは、極く平均的な身体つきの穏やかな印象の青年だった。軍帽はかぶっておらず、癖のつよい茶褐色の髪が額の上でピンと跳ね上がっていたりする。太い眉は、しかし、両端が下がり気味で軍人らしい威厳からはほど遠い。

「ああ、これはようこそ。プリンセス・オブ・メルティア？それともミス・トヒユナ、とお呼びした方がいいのかな」

「メイ……で構いません」

昔、似たような会話を交わしたことがあった。『シグナ・フォース』号に初めて乗り込んだとき、エリサ・ナーバン……当時は少佐……と交わした会話。あれが五年前。『勇将』ヒースクリフ・ローナクによる「メルティアの虐殺」直後。『銀河系大戦』の開幕。レーフラム・トゥリユー・ネレイドとの“再会”。全ての始まり。

マルクの視野の中で、水晶色の髪と濃紺の瞳の女性が静かな視線をマルクに据えている。

メイリアが、いわゆる“メルティア貴族”の一員であることを、マルクは知っている。かつて文学史専攻の学生であったマルクである。文学史の一時代、貴族文学と呼ばれる一ジャンルがあり、それが文学史の重要な位置を占めていたことは、マルクの知識の一端を占めている。ただし“貴族”と呼ばれる社会階級に対して、マルクの感情は好意でもなければ嫌悪でもない。そして、メイリアがレーフラム・ネレイド……“前期大戦”を通じてマルクにとって最大の敵手であった……の婚約者であったことも、マルクの知識に加えられている。

マルクは立ち上がり、敬礼する。余りうまくもない敬礼にメイリアが答礼すると、マルクは仮にしたらえられたらしいソファを指し示した。

「ネレイド提督のことは聞きました」

お気の毒です……と口にしかけ、マルクはその言葉を飲み込む。慌てて、わざとらしい咳払いで切り替えるべき話題を探す。慌ただしく脳裏の引き出しをひっくり返してみても、この場にふさわしい会話の種を見いだすことができず、マルクはいささか焦る。婚約者を失った傷心

の女性を前にして、マールクが話題に出せるのは、その亡くなった婚約者のことではないのだから。メイリアが会見を求めた理由を、マールクは察しかねていたのだ。

メイラー候補生が紅茶を運んで来てくれたのをマールクは感謝した。「ネレイド提督は、いいえレーフラムは、マールク提督とお会いしたいとよく口にしていました。戦場で敵同士としてではなく、友人としてほんの少し偶然が働いていれば、ここでこうして閣下とお話しているのは、わたくしではなくて、レーフラム……彼の方だったはずですもの」

話題を切り替えたのは、意外にもメイリアの方だった。

「閣下ももとは軍人志望ではいらつしやらなかったと伺っていますけれど？」

「……教師になるつもりでした」

マールクの応答はいささかの苦笑を含んでいたかも知れない。

「両親を一度に亡くしましてね。大学に進もうにも金がなかった。取れた奨学金は、中級学校での教師養成のためのものでした。まあ、私としてはそれでもよかった。何になるうとか、どんな大きな仕事をしてやるうとか、そんな希望は特になかった、というのが本音ですよ」

ちよつと驚いたらしく、サファリアを思わせる澄んだ群青色の瞳が瞪られて、マールクを正面から見据えた。

「先生に？」

「これでも文学史を専攻してましてね。あと少し単位が取れば大学を卒業できたんです」

「閣下も無理に軍人にされてしまわれたのですね、それでは？」

「無理に……というか。まあ、無理矢理であったことは事実です。もっとも、わたしのようないくもシカ教師に教えられる生徒たちの方がいい災難だったかも知れないが……ところで……」

マールクはメイリアの言葉遣いに引つかかる。

「“わたしも”とおっしゃったように聞こえましたか？」

レーフラムも強いられて軍人としての人生に足を踏み入れる羽目に陥つたのだ。本来の人生を歩んでいれば、彼は歴史の創造者ではなく、歴史の発掘者であつただろう。

「仮説だと言っていました。シエルメス人とル・ヨント人はおそらく起源を同じくする人類なのだ、と。何千年か前に、シエルメス人とル・ヨント人の祖先が今のシエルメスとル・ヨントに移住し、そのまま過去を忘れて戦争をしているのだ、と」

メイリアの故郷メルティアに伝わる“ユン・ル・ワントの星”の伝説。マールクは、思わず身を乗り出して自分の気がついて、慌ててティール・カップに手を伸ばした。

「……閣下と親しく語り合う機会があれば、その時の話題には軍事ではなくて、人類の起源について語り合いたいのだ……と」

「ユン・ル・ワント……ですか。古い伝承文学にそう言う名前があつたような気がする……後で調べておきましょう。」

で、メイリア。おっしゃりたいわけだ。シエルメスとル・ヨントは同胞だ。これ以上、戦つてくれるな、と」

「ええ、何となく、閣下なら分かつて下さるような気がして……勿論、連邦がどんな国で、連邦空軍がどんな軍隊か、いやと言つくらい知っています。でも、閣下はお分かりのほうです」

「無為の戦争はしませんよ、メイリア。これだけはお約束しよう」

ため息をつき、マールクは空になったティール・カップを受け皿に戻す。戦争を続けるということは、メイリアと同様の境遇の男女を無数に生産し続けることなのだ。いかに犠牲を少なくして勝利を握ろうとしても、一度の戦役で流れる血の量は数十万から、ときに一〇〇万を上回る。し

かも、勝利を得たとき、立場を異にする相手側に、身からのそれを数倍した悲劇を大量生産させていることになる。

「……しかし、即時の停戦は不可能です。お分かりと思いますが」

理解している、とメイリアは応じる。戦争をすぐに止めよ、などと言うつもりは本来はなかった。ただ、レーフラムが生きてあれば必ずマールクとの会望を望んだらうと思うのは、メイリアにとって単なる推測を越えた確信である。レーフラムに代わってマールクと一対一で会い、その為人を知っておきたかった。

マールクが問いを重ねる。

「なお、“ザ・ジャービス”の一員として、連邦政府に抵抗されるつもりですか？」

「いえ……」

もう、その気力が失せている。メイリアは隠さなかった。五年間の艦隊生活は彼女を芯から疲れ切らせた。レーフラムを失った精神面のダメージからも、彼女はまだ立ち直ってはいない。そして、精神面のダメージは、ミットリッフェル宙域で傷ついた彼女の肉体面の回復も大きく遅らせる結果になっている。

「……正直に言います。最近では戦艦に搭乗しているのも辛いんです。こんな時に逃げ出すように見えると思います」

戦艦を降り、辺境の惑星に引きこもりたい、というメイリアの希望は、マールクにとって理解し難いものではなかった。いや、彼にとってはメイリアの志向こそが自然であり、戦場に自らを置き続けたいとするレーフル・ファウルスの野心こそ、理解の域外に出るものだったとも言える。

メイリアは、レーフラムの遺したメモの写しをマールクに寄贈することを約し、マールクはメイリアの求めに応じて、共和国側の各種記録の閲覧を許可した。

「男どもは戦争するのに躍起でしてね」

婚約者の人生の軌跡をいささかなりとも記録に残しておきたいというメイリアに、マールクは全幅の同意を示して頷いたものである。

「歴史を記録に刻み込んで暇もない。このバカげた戦争の愚かさを、後世に伝えて頂けると有り難いですね」

努力します……応じたメイリアの頬に、ほんのわずかな微笑と呼べるものが浮かんでいるのを、茶器を下げに来たメイラー候補生が記憶し、その印象を一言だけ残している。

「微笑っている氷の彫像……陳腐な表現ですが」

メイラー候補生……この後、まもなく任官し、メイラー少尉となるのだが……は、マールクがつけ加えるような調子で切り出した言葉を記憶している。

「……無礼を承知の上でなんですが、プリンセス・オブ・メルティアとしてのあなたにお願いしたいことが一つだけあるんですが……」

メイリアの不審そうな表情を網膜に残して、メイラー候補生は司令長官私室を退出したために、マールクの“プリンセス・オブ・メルティアとしてのメイリアへの依頼”の内容は、彼の聴覚を刺激するには至らなかった。

「できるだけ早期に、この戦争を終わらせるために必要な書簡です。早速ですが、大統領から打診がありました」

メイリアは、マールクからの依頼を僅かに首を傾げて聞き取り、そして頷いた。

「分かりました」

少し笑って……これは表情を消すためのものではなく、メイリア本来のくすくすとしたような笑顔だった。

「勤勉でいらっしゃるんですね、ミス・ミュッケル」

「わたしの一〇倍は、ね」

うまくもないウィンクをしてみせるマールクに、メイリアはもう一度頷いて見せた。

「明日、出発するまでにお届けします。それでよろしいでしょうか？」

「感謝します」

マールクが、メイリアの落ちつき先の惑星を決めるために、両日中にシャールブックと協議すると約して会見は終わった。不自由な左足をかばいながら立ち上がり、敬礼するメイリアに、マールクはやはり立ち上がり、彼にしては精一杯の敬意を込めて答礼した。

「プリンセス・メイリア……」

「その呼び方はご遠慮させて下さいと申し上げました、閣下」

「これは失礼。いずれ、あなたの記録ができあがったら、わたしも拝見したい。その時には、またお目にかかりましょう。まだ、あと一年か一年半ほどは、このろくでもない戦争に付き合わなければなりません」

「ええ」

少し長く伸びた銀白色の髪が、〇・二Gの人工重力の中、緩やかに舞い踊った。

「ええ、またお会いしたいと思います。お会いできるのを楽しみにしております。閣下もお元気で」

メイリアはシャトルで戦艦『ネーベル』を離れる。彼女はこの時の会見でのマールクの印象を書き遺している。“偉大な平凡人”と。一方、マールクの方は、“ああいう女性を残して先に逝かなければならないとはねえ……”。互いに好印象を抱き、そういう相手を敵と呼んで戦わなければならなかった歴史の皮肉に憮然とした感情を抱いたことだけは確かである。

なお、この時の会見で、両者の間に交わされた約束はよく遵守された

が、ただ一つだけ遂に守られなかったことがある。両国の歴史は等しく記している。マールクとメイリアの会見は、この時が最初で、そして最後であった、と。

(四)

“コーラル戦役”の勝敗を決した“アルムタート宙域会戦”で敗れたコーラル国防軍艦隊約八〇〇隻。シャゴル・グリューガーに率いられたこの艦隊がデュレーン圏に入り込んできたのは共和国暦で一〇月に入つてすぐのことだった。

“デュレーン圏で海賊の掃討に当たつていたメルの艦隊が彼らに接触しました。デュレーン圏は、旧連邦圏の一部であり、デュレーンに対して政治的亡命を求めるのはシエルメス連邦市民としての正当な権利だと、グリューガー提督は主張しています”

ラングが説明を引き継ぐ。

「それで、彼らはどこに？」

「セイモス恒星区とデュレーン恒星区の境界宙域ですが……フォーゲルという恒星系に停泊しています。補給物資はほとんど底を突いており、ミスタ・タウナーの指示で食糧だけは供給されているとのこと」

「飢えた軍隊と言つのは恐ろしいですからね」

くつきりした輪郭の眉をしかめながらコーティが口をはさむ。

「補給を許可したら、それも口実にならないの？」

トラブル回避のために補給を認めないという選択肢もあり得るのだ。

連邦の公敵たるコーラル国防軍の残存部隊への補給は、連邦に絶好の口実を与える。タウナーが短期的な保身だけを考える政治家なら、補給を拒否し、退去を要求するだろう。

しかし――

「もつ公然と敵対しているのだ。いまさらトラブルを恐れてどうする。それに、コーラル艦隊が飢えに任せて暴走すれば、連邦空軍としては連

邦圏の安全保障”を口実にデュレーンに兵を侵入してくるさ。そういう連中だということは、連中のボスを務めたことのあるわしには十分、分かつとる”

伝えられてきたタウナーの言葉を、マールクたちは素直に首肯するのだ。

「さて、どうしましょう」

マールクの口調はぼやきに近い。アリシアがくすつと笑う。

「政治的判断を下せ、とおっしゃるのね、提督。グリューガー提督を受け入れるか、それとも拒否して力づくでも出て行つてもらふのか」

「そういうことになります」

「それなら、いまさらもう考えることは何もありませんわね」

デュレーンのタウナー、ひいては“ザ・ジャービス”と手を携えることを決めた時点で、新共和国も連邦への敵対を決めてしまつていふのだ。「そうだとすれば、少しでも味方を増やすことを考えた方が実りがあります」

デュレーンとの協力関係を樹立し、さらにデュレーンを経由して連邦の資本を大規模に導入していると言っても、何百万もの将兵を戦場に動員し、何年もの戦争を続けさせる経済的な余裕はない。新共和国自身が同時に動かせる艦隊は、最大でも艦艇で二万。将兵数で二〇〇万人程度だろう。それですら丸一年、動員し続けられるかどうか、というところである。

連邦はこの五年間に大損害を受けたとは言え、最大の弱点だったコーラルを制圧し、一度は壊滅した艦隊兵力さえ、三万隻を越えるまでに回復させている。しかも、共和国宇宙軍の技術レベルでは建造不可能な超ド級艦の『シグナ・フォース』級、『シグナス』級を次々に戦線に加えるところがある。

『鉱工業生産能力において、両者の比率は五対一か、それ以上。総合戦力における差異は概ね二〇、三〇対一前後と見られる』

という数字を、アリシアもマールクも、ほぼ正確な実体を表すものとして受け取っているのだ。

撃ち減らされたとは言え、“ザ・ジャービス”と旧コラル国防軍の艦艇を併せれば一万五〇〇〇隻を超える。今の新共和国にとって貴重な兵力だった。

「では、決まりですね。グリューガー提督には“ザ・ジャービス”と合流してもらいましょう。それから、グリューガー提督ご本人にはできるだけ早く、ここへ来てもらいましょう。シャルブック提督も呼ぶが、出向いていつて顔を合わせておいた方がいいでしょうね。手配をお願いしますか、提督？」

「了解です」

「でも、狡いですわ」

「何が、です？」

「政治的判断だからということ、わたしに責任を押しつけて、自分は楽をなさろうと言うのでしょうか？わたしにしても経験不足の小娘でしかありません。あなた以上に正確な判断が下せるという保証はないんです」

マールクはにやりと笑い、収まりの悪い髪をかき回す。

「まあ、楽をしたいのは事実だし、一人で判断して、あとで後悔したくない、というのも事実です」

マールクはティー・カップを空け、もう一杯を注ぐとするアリシアに謝絶の意思を示して手を振った。

「否応なしに、もう一度、本格的な戦役になるような気がします」

退出の意を伝えて、マールクは立ち上がる。

「多分、今度の戦役で本当に最後になるでしょうけれどね」

マールクは、特に予言したという意識はなかったし、それを耳にしたアリシアを初めてとしてネイやラングにも違和感を呼び覚まさなかった。一人、コーティだけがきょとんとした表情で目を瞠っている。もっともコーティもマールクの言葉が決して根拠のない雑談ではなかったことを知ることになるのだが。

アリシアは書き遣している。マールクはレーフル・ファウルス・ネレイドという軍人の本質を、データによらず情報によらず、直感によって悟っていたのだ。と。レーフル・ファウルスは、兄レーフラム・トゥリユー・ネレイドと戦場で見えることを望んでいた。そして、レーフル・ファウルスは更に“銀河系大戦”を演出したもう一つの巨星であるマールクとの戦いを望んでいるのだ。

マールクと戦場で見え、雌雄を決したとき、レーフル・ファウルス・ネレイドは本能としての戦いを放棄するのではないか。それが、用兵者としての兄の超克を望み、“バレルヴァレイ会戦”の結果、望みを封じられたレーフル・ファウルスにとつての代償行為だったとしても。

“後期銀河系大戦”は、レーフル・ファウルス・ネレイドが“英雄”との名を持つ真紅の座に至る過程であり、彼が鮮血にまみれた“英雄”の座を手にしたとき、“後期銀河系大戦”……そして、“銀河系大戦”は過去系で語り得る歴史の一コマとなったと言つべきだろう。

しかし、まだ過去系で語るのは早すぎる。“銀河系大戦”は、その歴史上の扉を閉ざすまでに、なお膨大な量の流血を要求していたのであるから。

共和国暦七二四年一〇月二五日（連邦暦五七四年一〇月二日）、ヤンデキフィティ艦隊に牽制されるままに、デュレーン恒星区の外れ、フォー

ゲル星系に留まっていたコーラル艦隊に、リー・タウンーの名でエムス星系への“退去”が求められた。

“デュレーン恒星系政府は、デュレーン恒星系への旧コーラル国防軍艦隊と艦隊将兵の亡命を認める。星系エムスは、旧連邦の直轄星系であり、現在はシュネーゼル共和国が連邦に代わって統治している。また、エムスは旧コーラルの市民の多くが流刑に処せられた星系であり、現在も多く旧コーラル市民が居住している。旧コーラル国防軍が亡命政権の樹立を望むと言っているのであれば、好適の地と言つべきであらう。”

なお、デュレーン恒星系政府は、旧コーラル自治政府の、独立政権としての存立を承認する。従つて、旧連邦憲法典の規定に基づき、旧コーラル国防軍艦隊とその将兵に対して、欠乏物資の補給を認めるものである。”

「これは、ミスタ・タウンー一人の知恵ではありませんまいね」

“命令文”を一読したオーリア大將が鼻を鳴らす。シャ・ゴール・グリュウガーは、遅しい肩を僅かに疎める動作でこれに応えた。

「マールクは、連邦との戦役を不可避と見た……というところだろう、ジュンガリイ。連邦とこのまま平和裡に共存できると読んだなら、武力に訴えても我々をデュレーンから叩きだしただろうからな」

「ほう？」

単に甘いだけではありませんか、と問い返すオーリアに、グリュウガーは言葉を継ぐ。何の、マールクがそんな甘ちゃんなものか。

「奴は……いや、彼はちゃんと計算しているさ。連邦ともう一戦役構えるとして、彼等の補給力はどうか、将兵は十分か……とね」

「すると、我々は捨て駒にされる……と？」

「さてな。いずれ、シュネーゼル共和国政府とやらの首脳とも会見させてもらえるだろう。その時に、マールクの思案をノックしてみても遅く

はあるまい」

「しかし、エムス……ですか。ほとんど辺境宙域ですな。連邦空軍ここを構えるなら、トゥローデスロツホか、フォーゲルの方がよからうにとも思えます。マールク提督は何を狙っているんでしょうかね」

「さてな？」

グリュウガーはもはや不精鬆と言つには長すぎるほどに伸びた顎髭を撫で直す。

「食えない男だからな。何を考えているのか、わたしにも十分には読めん」

マールクから“食えない小父さん”と評されるコーラルの元提督は、しかし、デュレーン政府の“命令”の裏に立つのが、マールクではなくアリシア・ミュッケルであることを知らない。

グリュウガーの視野は、本人は認めないにしても、アリシアのそれには及ばない。

「が、とりあえずは補給だ。補給を許してくれると言つのだ。遠慮なく頂こうではないか。いずれにしても代償は要求されるのだ」

可能な限りの補給船を伴つての離脱だったにしても、約二カ月の脱出行には十分な補給物資を携えていたと言ひ難かつた。補給難や、航路途上での宇宙海賊との戦闘などで、落伍艦艇が続出。アルムタート星系を離れたとき八〇〇〇隻余りを数えていた旧コーラル国防軍艦隊である。それが、今、グリュウガーの指揮に服するものは六〇〇〇隻を辛うじて上回る程度である。

グリュウガーは評している。

「六〇〇〇隻……にしても一〇〇万を越える人間が、わたしと生死を共にしてくれようと言つただからな。これは感謝すべきことと言わねばなるまいな」

グリューガー艦隊の最終寄港地としてアリシアがエムスを指定したのには無論、理由がある。彼女はすでに、連邦空軍によるターミア宙域への大規模侵攻作戦（『三叉戟作戦』^{オペレーション・トライデント}）の発動を見越していた。グリューガーの艦隊をフォーゲルなりトゥローデスロツホなりに迎え入れれば、彼らが艦隊を再建する前に連邦空軍の電撃奇襲で戦力を消耗し尽くしてしまつ可能性があつたのだ。

「それに、そうなってしまうと、対決の図式として、連邦対デュレーン恒星区ということになり、連邦空軍は連邦圏内の叛乱鎮圧という名目を得ることになりますね。シュネーゼル共和国、あるいは旧コーラル国防軍の存在は副次的なものに押しやられ、わたしたちは不法な紛争への介入者という立場を押しつけられる……そして一旦デュレーンを制圧してしまえば……」

勝ち得るのであれば、連邦空軍は共和国圏……旧共和国圏になれ込んでくる。幾ら、“難攻不落”のドライバオム要塞に拠るとしても、連邦圏での艦隊決戦に敗れた共和国宇宙軍に、彼らの侵攻を食い止める余力は残っていないはずだった。軍力で蹂躪し、かつてのコーラル恒星区と同じ経済的な植民地状態に共和国圏を陥れる。“前期大戦”での戦禍に、共和国への憎悪を深めている連邦市民は、ル・ラント市民がどのような境遇に置かれようと、気にも止めないだろう。

結局、連邦は連邦圏を統治する“もう一つの政府”の政治的な代理人であり、連邦空軍は連邦政府を通じて実施される経済行動を遂行するための最も原始的な暴力装置にほかならない……それが、シエルメス連邦という巨大国家に対するアリシアの基本的な視点と云っている。

「憂鬱なことだけれど、連邦とは兄弟のようなものだからね」
そう評するアリシアに、コーティが戸惑った表情で問いただしたものである。

「アリシア、何で連邦とあたしたちが兄弟なのさ？」

「それはね……」

辛辣な調子でアリシアは応えている。隣人ならば選ぶことができる。

しかし、兄弟ばかりは選ぶことができない……と。

「こればかりはね。こちらの好みでどうこうできる問題じゃないのよね。憂鬱なことだけれど」

時は少しあと、場所はメルティア。

「なに、お父さま？」

ラルクの顔を上げさせたのは屈託のない明るい声。視線を転じた先に、初夏の空を思わせるスカイ・ブルーの瞳がサン・ルームの日差しを弾いて煌めいていた。

「メイから手紙が来たよ。親展^{コフレマンショ}ね」

「メイ叔母さまから？」

“銀河系大戦”が始まったときには七歳だったファーリアも既に一二歳……もつとも、“正確には一二歳と半分”と応じるのがファーリアだったのだが。

「親展で？」

ああ、と頷く父の表情を、ファーリアは僅かに首を傾げるようにして凝視する。

「じゃ、戦争のこと？」

「察しがいいね」

ファーリアは聡明そうな視線を瞬かせる。一〇代にさしかかった頃から急に背が伸び始めたファーリアは、この時期、ちよつと痩せぎすな感じと同時にこの少女の本質である聡明さを、強い印象として見る者に与

えている。

「戦争をどうしたらやめさせられるか……そういうことのお話なの？」

「ザ・ジャービス」の艦隊をエルメティアに入れさせてはどうかとね。メイはそう言ってきた。

「ザ・ジャービス」？

遠目にはほほえましい父と娘の会話のシーン。交わされる会話はメルティアのみならず、シエルメス連邦全体をさえ左右しかねない内容。

「ザ・ジャービス」の人たちに来て貰って、どうしないさいって叔母さまはおっしゃってるの？」

「わたしに任せたい……とね。レーフル・ネレイド提督はもうすぐ大々的に艦隊をデュレーンに入れる。マールク提督と正面から戦うつもりだということだ」

コーティア・バードフェザーが告げた内容を、ラルクはそのままフリーリアに話して聞かせる。

形のいいプラチナ色の眉をきゅっと寄せて、フリーリアは気に入らなげにかぶりを振った。

「そついうの、好きじゃないわ、お父さま」

「どう好きじゃないのかね」

ラルクは、フリーリアの判断をそのまま受け入れようとは思っていない。いかに聡明でもフリーリアは一二歳の少女でしかない。まだ、判断力が年齢に制約されて不思議ではない。無論、フリーリアも、政治家としての父が、決して甘いだけの父親でないことを熟知している。

フリーリアの小粒な前歯が下唇を軽く噛みしめるようにする。

「マールク提督の思う通りにはいかないかも知れないと思う。行くかも知れないけれど、行かないかも知れない。うまく行かなかったら……」

「エルメティアの安全のために、わたしは“ザ・ジャービス”を密かに処分してしまわなければならないだろうね」

こくん、と頷く愛娘に、ラルクは軽い驚きを隠せなかった。

「お父さまに、そんなことをして欲しくない。だから好きじゃないの」

「マールク提督の狙いが当たって、上手く休戦を調停できれば、連邦でのメルティアの地位は上がる。連邦も無闇にはメルティアの存在を無視できなくなる……一方、連邦空軍艦隊が今度の戦いに圧勝してマールク艦隊が壊滅してしまったら、メルティアは連邦にとつての裏切り者だね。いや、好意で調停に乗り出そうとしても、“ザ・ジャービス”の存在が一般に知れば、連邦に絶好の口実を与える……」

ためらい、フリーリアは言う。何もしないで、知らない顔をしているという選択もできないではないはずだ……と。

フリーリアの意見を、ラルクは首肯した。

「そつ、それも策だと思っね。だが、そうなると戦争は止め手もなくするずるといつまでも続く……かも知れない。無論、どちらかが圧勝して、完全にけりがついてしまえば別だが……」

沈思に陥った父の傍らにしばらく佇立していたフリーリアは、やがて足音を忍ばせるようにしてサン・ルームから滑り出る。明るいサン・ルームから室内に入ったフリーリアは、一瞬視力を奪われて目を細める。闇の一角が切りとられて動きだしたような、そんな錯覚を覚えて、フリーリアは彼女らしくもなく小さく悲鳴を上げかけた。

闇が風を孕んでフリーリアに躍りかかってくる。悲鳴を上げそうになっていたフリーリアの唇が、急にほころんでいかにも嬉しげな微笑を浮かべた。

闇が、狙いすましたようにフリーリアの細い肩を捉え、ピロッドのような手触りと温もりを帯びた毛皮が、巧みに彼女の首筋にまつわりつい

た。

「帰ってたの、メルシャ？だめ、いたずらしちゃ……」

金目銀目のオッドアイの白猫。連邦高等学校寄宿舎でのファアリアの同居人は、既にスルフェイク侯爵邸周辺を新たな自分の縄張りとし心得て、何の違和感も見いださないようだった。

言葉が分かったのでもあるまいが白猫は、ファアリアの肩から、ぱん、とフロアに飛び降りる。

ふ、と何かが胸の中で弾けるのを感じて、ファアリアはつま先の行き先をくりりと一八〇度回転させた。彼女の足元にまつわりついていたメルシャがびつくりして飛びすさる。

オッド・アイが見上げ、抗議するようにくるるとい咽喉声を上げた。

「あ、ごめん、メルシャ」

メルシャの咽喉の下を素早く撫でてやり、ファアリアは踵を返してサン・ルームに歩み入った。

歩調まで改めて歩み入ってきたファアリアに、ラルクは驚いて目を瞠った。

「ネレイド提督も戦争を終わらせたがっている……そう思っただね？」

ファアリアはこくりと頷く。レーフル・ファウルスは無意味に戦争の継続を望んではない。もし、艦隊決戦でマルク艦隊を決定的に撃破できず、戦線が膠着するようなことがあれば、レーフル・ファウルスの能力に対する批判が表面化することは間違いない。若すぎる成り上がり者として、レーフル・ファウルスを毛嫌いする勢力は、連邦空軍部内にも多い。また、連邦政府や議会には、レーフル・ファウルスの急激な台頭を危ぶむ声が決して低くはないのだ。

ファアリアが一二歳の少女らしからぬ面を見せるとすれば、自分の考えの甘さを認識している点だった。レーフル・ファウルスにとって、

ファアリアからの申し入れなどをベースにして政略や戦略を論じるなど論外以前でしかない筈だった。

「調停する用意がある……って告げるだけでいいと思います」

それでレーフル・ファウルスの思考に一定の方向を与える効果を得られるはずだ……ラルク・トヒユナはそう理解し、頷きを返した。

「わたしの親書を用意しておこう。すぐに、用意をしないさ」

「はい、お父さま」

軽やかな足どりで、再び踵を返しかけ、ファアリアは長い水晶色の髪をひらめかして父を振り返った。

「メイ叔母さま……帰ってこないの、やつぱり？」

帰るつもりはないのだらう……それがラルクの答えだった。

メイリアからの親書を映し出したスクリーンに視線を戻した父の横顔に視線を走らせ、ファアリアは滑らかな身のこなしでサン・ルームを出ていった。

「……判断には一種の陰惨さがありました……」

後年になってファアリア・トヒユナはこの時のことを回想している。

「父が“ザ・ジャービス”のエルメティア来訪……この言葉がこの場にふさわしいものかどうか……そう、エルメティア来訪を黙認する意思であることを、そのとき悟りました。そのときの父には、有り得べき未来図として、連邦空軍、またはマルク艦隊の圧勝、もしくは勝敗が定まらないままの膠着状態の三つがあり、その内、マルク艦隊の圧勝だけは有り得ないものだということが分かっていたと思います。父は、父の決断が最も陰惨な形での肅清を招くことになるかもしれないことを、完全に心得ていたのです。そして、この決断を下せる人物は、当時のメルティアには父しかいなかったのです」